

ネット上のフェイク情報にどう対処し、見分け方をどう教えるか？

Greatchain

2017/10/16

読売新聞（2017/10/14 朝刊）に、上記のお題をいただいたので、私なりの考えを述べてみる。これは、いつもこちらから問いかけていることで、ちょうどよい機会であった。まず言っておきたいことは、メディアが、ある言葉や話題を持ち出さないということは、そのものの存在を認めないということである。たとえば主流メディアでは、UFO という言葉をタブーにすることによって、その存在を認めず、くだらぬ話題であるというメッセージを送っている。そこに何らかの理由があるはずである。

UFO なら大して問題ではない。もっと重大な言葉で、特に世界情勢を論ずるようなときに、ネット上では常識を共有して、互いに使っているが、主流メディアでは絶対に使わない、タブーの言葉（概念）がいくつかある。これによって、この2つの世界が全く違った、時には対立する世界になる。最も身近なのが「ケムトレール」である。これを報道記者が職業柄、知らないはずはないが、記事や放送には絶対に出てこない（天気予報にも出てこない）。言葉がなければ実体もなくなるわけで、一般の人々は目に入らないか、入っても話題にすべきものではないと思っている。私は人々の反応を観察しているので、よく知っている。話題にならなければ、疑問の対象にもなることもない（少数の場合を除いて）。読売新聞は、わざわざこれを飛行機雲と説明したことがある。

これは、ケムトレールを撒く者たちの、メディアとの共謀による作戦が、成功しているのがある。実際にはこれは、普通、アルミニウム、バリウム、ストロンチウム微粒子が主成分と言われ、毒物である。自閉症、アルツハイマー病などの、大きな原因と言われる。

この目に見える現象の他に、決定的に、インターネットと主流メディアの世界を仲違いさせる、いくつかのキーワードがある。「ニセ旗 (false flag)」という言葉がその一つで、ネット世界では、これがなければ現在の世界事情は説明できない。これはアメリカの米西戦争以来の常套戦略と言われ、その最大のものは「9・11 テロ」で、自分で自分の財産や国民を攻撃しておいて、敵の仕業だと宣伝し、戦争の口実を作る戦術のことである。ベトナム戦争の「トンキン湾事件」もそうであり、真珠湾攻撃も、準ニセ旗戦略だと言える。なぜなら、あ

これは確かに、アメリカ軍が自国軍港を攻撃したのではないが、日本軍が攻撃してくることを完全に見破りながら、あえて撤退も反撃もさせなかったからである。その結果、徹底的な日本憎悪によって国民は結束し、日本を滅ぼす手段として大成功だった。9・11は、「パール・ハーバー規模の戦争のきっかけが必要」と判断されて、決行されたものだ。

この言葉が存在しないということは、そんなことは起こったこともなく、これからも起こらないという見方を示すもので、世界が全く違ってくる。これはロシア大統領プーチンにも共有されており、彼は、「遠からずアメリカは、ロシアに対してニセ旗攻撃を仕掛けてくるだろう」と予言している。かなり確率の高い予言である。(彼は、ネット世界で我々の使うキーワードを、ほとんど使っている——ケムトレール、ペドフィリア、New World Order など)。

このNWOアジェンダ (One World Government を建設するための) も不可欠のキーワードであり、ネット世界では、よくも悪くも、この概念を中心として世界が動いており、それによって、中東を始めとする世界が多大の苦しみを強いられている。そして、それを動かしている者たちが、米政府背後の影の勢力であり、これを指す言葉はいくらでもあるが、グローバリスト、パワー・エリート、NWO陰謀団、イルミナティなど、その一部である。これらは今の世界を理解するのに、なくてはならない概念であるが、そのいずれも新聞やテレビでは、怖いもののようにタブーになっている。これではインターネットの世界と、主流メディアのしている (見させている) 世界が全く違ってくるのは当然である。ネット世界の方がより核心の世界、より深い、関連し合った世界を見ている。

主流メディアのタブーだらけの世界は、たとえば言えば、物理学の世界を解説するのに、エネルギーとか質量とかいう、基本的な概念を抜いて説明しようとするようなものである。そして、自分の見ている表面的な世界に合わない概念を——たとえば今“ペドフィリア”は、世界の「悪」の本質を明らかにする不可欠のファクターである——フェイク概念とかフェイク情報と呼んで、切り捨てられてはたまったものではない。リンゴが木から落ちた原因は、風が吹いたからなのは明らかなのに、万有引力などというフェイク概念を持ち出して民衆を惑わすのはやめよ、と言っているようなものだ。

では、何がフェイク (偽物) で何が本物か、どう見分けるかということになる。その方法は、誰もが無意識にやっている、仮説と実証というやり方に尽きると思う。誰も頭から、これは真実だから信じなさいと言われて、信じられるものではない。あらゆる状況からして真実と直観するものを、仮に真実だと仮定して、あれこれ考え併せているうちに、いよいよ真実と考えるよさそうになる。しかし断定はしない。アメリカの影の政府の存在にしても、そのようにして“容疑を固めた”ものにすぎない。そういう実体を仮定すると、今までナゾだった

ことが、次々に、腑に落ちるというだけだ。特にこの奥の世界は、侵入して見ることでできない秘密の世界だから、誰も確認した者はいない。トップに誰がいるのかわからない。ただ、ルシファー（サタン）がいることは確かだと思える。

ところで、私が頻繁に翻訳紹介している www.nnettle.com というサイトの、「レディ・ガガ：私は、魂をイルミナティ暗黒勢力に売ったことを後悔する」（2017/9/25）という一編に対する“いいね”評価が、他と比べて抜群に多くなっている。これはどう解釈すべきかわからないが、悪魔に魂を売るという行為が、（比喩でなく）現実のものとして受け入れられるようになったのは、確かではなかろうか。悪魔は実在する。

そのような理解の上に、個々の情報が偽物か本物かを、見分ける方法について述べてみたい。このサイトにある多くのペドフィリア関係のニュースの中に、こういうのがある。これは誰も聞きたくない話だが：——ある牧師が12歳の少女をレイプした。少女が告訴して表沙汰となったとき、教会は裁断を下した。それは、その少女が、牧師の妻に謝罪することで解決せよ、というものだった。なぜなら、牧師は少女に襲われたと証言したからである。

これは、「まさかそんなことが」と思わせる話である。教会か誰かに恨みをもつ者が、作った話だろう、フェイクだろう、と——。しかし私は、これは本当の話だろうと直感した。なぜなら、私は、聖職者と被害者と教会の話を、いくつも読んで訳しており、パターンがよく似ていることに気付いたからである。詳しくは語らないが、その一例は、これと同じ裁判になったとき、聖職者が（当然ながら）激しく裁判員に責められ、開き直ってこう言った：「その場になかったあなた方に、この子にその気がなかったと、どうして言える？」 もう一つは、加害者・被害者ともに集団で起こったもので、ペド聖職者は、「我々は彼ら（少年）から誘われたのだ」と言った。もう一つはタイトルを引こう：——「カトリック教会：ペドファイル僧侶については女性に責任がある」その他、3歳の子供についてさえ、ありえないことを主張する聖職者がいた。なお、教会が被害者を責め、身内を許そうとするのは当然かもしれない。

これはもし、それぞれ単独で読んだなら、聖職者のペド犯罪だけでなく、彼が途方もない大嘘つきであることに呆れ、激怒するであろう。しかし私はこれらの話そのものが、フェイクでないだけでなく、聖職者の証言もほぼ本当の話ではないかと思う。このように解釈したとしても、彼らの罪が少しでも減るのではないが、彼ら聖職者が悪魔に取りつかれたとき、おそらく無意識のうちに魔力がかかって、被害者を引き付けるのではないだろうか？ あるいは引き付けられて寄ってくる幻影を見るのではないだろうか？ これは唯物論者には通用しない話だが、このような解釈しかないように思う。